

英文ライティングにおけるジャンル分析方法論の比較研究

後 藤 隆 昭

1. はじめに

第二言語ライティング教育において、モデルとなるテキストのジャンルの特徴を分析し、学習者のライティングの指導に応用する研究が、EAP (English for Academic Purposes) や ESP (English for Specific Purposes) を中心として行われている。研究対象は、工学や医学などの学術分野だけではなく、法律やビジネス文書など、専門領域のライティングに至るまで、様々なジャンルへと広がりを見せている。

そこでは分析法として「ジャンル分析」という手法が採用されているが、必ずしも統一した方法によって行われているわけではなく、テキストをどのように分析するかについて、研究者によってアプローチの違いがあるように見える。

しかしながら、基本的な問題として、ジャンル分析の方法論を比較したり、詳細に検討する先行研究はほとんど見当たらない現状が続いている。

ますます専門化していく L2(第二言語) ライティング教育において、今後、ジャンル分析の方法論を問う理論研究は必ずや求められてくると思われる。

以上のことから、本論では Swales (1990)、Bhatia (1993)、Hyland (2004) などによる代表的なジャンル分析の手法を概観し、比較分析することで、その共通性や差異を明らかにしてみたい。

2. 背景

先行研究の検討に入る前に、ジャンル分析が出てきた背景について見ておきたい。背景知識を得ることにより、どのような要請でこうしたライティング研究が登場したのか、その目的を明確にすることができると思われる。

L2 ライティングにおける教育の変遷については Paltridge (2004) が詳しく述べている。

初期の L2 ライティング教育は、制御された、誘導的な作文であった。この方法は 1940 年代中期から 1960 年代中期まで支配的であったという。しかし、1960 年代中頃に、教師はそれでは不十分だと感じ始め、修辭的機能に重点を置くように変わった。即ち、センテンス・レベルからディスコース・レベルまでテキストを模倣し、描写文 (description)、物語文 (narratives)、比較と対照 (comparison and contrast)、原因と結果 (cause and effect)、一般化 (generalization) などのテキストタイプに教育の焦点をあてるようになったという。

1970 年代に入ると、L1 ライティング教育と同じように、書き手を中心にし、自己表現や書く過程に焦点を当て、「構想」「下書き」「推敲」といった一連の手順を経るプロセスアプローチが取り入れ

られる。しかしながら、プロセスアプローチは必ずしも普遍的に受け入れられた訳ではなく、現実的に、特定状況におけるライティングの要求に対する準備になるのかなどの疑問が提示された。

このような問題意識から、学術 (academic) や専門領域 (professional settings) において、書き手に何が期待されているかということや、学習者がそうした状況で、「ジャンル」をコントロールする必要があることから、「ジャンル」に基づく教育が始まった。

大井 (2004) は、こうした L2 ライティング教育の推移を、形式重視 (1960年代～)、書き手重視 (1970年代後半～)、読み手重視の教育 (1980年代後半～) というように「3つの流れ」として整理し、読み手重視の教育の流れからジャンルに基づくライティング指導が出てきたと位置づけている。次に述べる先行研究においても、「読者」を意識した、様々な分析法を見ることができる。

3. 先行研究

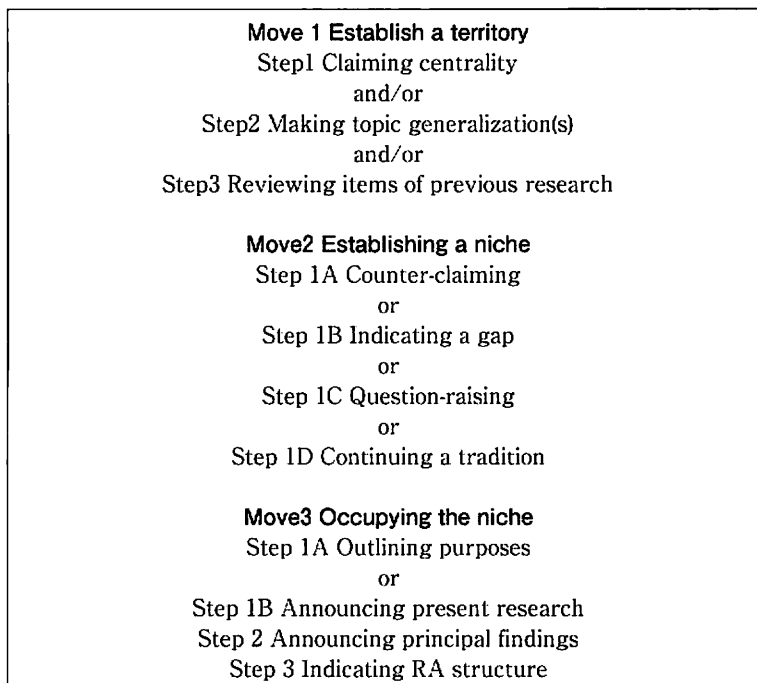
3-1. Move 分析

ジャンル分析において頻繁に用いられている方法は、Swales (1990) による Move や Step による修辭学的パターンの分析である (田地野彰他, 2008; Bhatia, 1993; Hyland, 2004)。なかにはジャンル分析 = Move 分析という暗黙の前提で使用している研究も見られる (Furuya, 2006)。

Move 分析とは、テキストの中には論の展開の動き (Move) があり、その中にさらに細かい展開の動き (Step) が内包されていると捉えて、テキストのレトリック構造を明らかにする分析法で、その有効性が指摘されることが少なくない (Bhatia, 1993, p. 32; Dudley-Evans & St John, 1998, p. 31)。

Swales (1990) は、研究論文の導入部 (イントロダクション) において、3つの Move が順番に設定され、その3つの各部分で Step が認められることを指摘し、「CARS (Create a Research Space) モデル」を提示している (図1)。

図 1



最初の Move 1 では、自らの研究領域を確立するため、研究トピックが該当ジャンルにおいて主要な関心事であるという主張や、先行研究のレビュー、トピックの一般化などが行われる。次の Move 2 では、先行研究の検証により、研究間の隙間 (niche) を指摘したり、疑問を呈したりすることで、自らの研究意義を明らかにする。最後の Move 3 では、研究目的や概要を説明したり、論文の構成などに言及する。

Move それぞれに下位の Step があり、ミクロなレベル (Steps) から、マクロなレベル (Moves) まで、各部分がテキストのなかで呼応し合い、全体としてコミュニケーション上の目的を達成すると考える。

3-2. 7 Steps アプローチ

Swales (1990) が学術分野をジャンル分析の主な対象にするのに対し、Bhatia (1993) は、販売促進文 (sales promotion letters) や判例 (legal cases)、求職文 (job applications) など、専門領域 (professional settings) にまでジャンル分析の応用範囲を広げている。

Bhatia (1993) はジャンル分析を非常に強力な分析システムであり、他の方法より、話し言葉や書き言葉の機能的な種類を詳しく描写することができるとし (p. 39)、7 段階 (Steps) に基づいたジャンル分析法を提示している (図 2)。このアプローチを意識した実際の研究例も見られる (Hafner, 2008; Hüttner, 2008)。

図 2

1. Placing the given genre-text in a situational context
2. Surveying existing literature
3. Refining the situational / contextual analysis
4. Selecting corpus
5. Studying the institutional context
6. Levels of linguistic analysis
 - Level 1 : Analysis of lexico-grammatical features
 - Level 2 : Analysis of text-patterning or textualization
 - Level 3 : Structural interpretation of the text-genre
7. Specialist information in genre analysis

第 1 の段階は状況文脈的にジャンルを捉え、ジャンル使用者の過去の経験やジャンルの背景知識を把握することであり、なぜ慣習的にそのように書かれるのかということを理解することである。

2 の文献調査は、学術的な参考文献だけでなく、専門家の助言や手引書、ガイドブックなども対象として含まれる。

3 では 1 の段階で述べられたことをさらに発展させ、ジャンルの書き手／話し手、読み手／聞き手、そこでの発信者と受信者の関係や目的、トピックなどを定義づけたり、テキストが表現しようとしているトピックや主題、テキスト外の現実を特定することである。

4 はジャンルを代表し、電子化された言語資料であるコーパスの選定についてである。コーパスの適切な種類やサイズを決定するためには、ジャンルやサブジャンル、他ジャンルとの違いを明確に定義する必要がある、それは、コミュニケーション上の目的や状況文脈、テキスト上の示差的特徴に基づいて行われる。

5 はジャンルが使われる状況文脈や、そこでの言語使用を支配する規則や慣習を研究することである。

6 は、さらに細かく3つのレベルに分かれており、ジャンル分析者はどのレベルで言語特徴がよく現れているのか判断する必要があるとし、それは複数のレベルに渡ることもある。

レベル1は、大規模コーパスの統計的分析により、多様で代表的なテキストにおける特徴的な言語使用を量的に分析することであるが、これでは言語の表層的な特徴しか特定できず、ジャンルにおいてどのようにコミュニケーション上の目的が達成されるかについての説明が十分ではない可能性を Bhatia は指摘している。

レベル2では、ジャンルに応じて言語使用の制限があることから、慣習的な言語使用の方略的な側面を分析する。一例として「広告」が取り上げられており、商品のポジティブな描写が方略であるため、形容詞や名詞句が頻繁に使われていることを指摘している。

レベル3は、ジャンルにおける構造的解釈を問題にし、特定のジャンルにおいて、好まれるコミュニケーション手法を明らかにすることである。具体的な分析法としては、Swales(1990)のMove分析を紹介している。もっとも、この手法については、ジャンルの構成や方略を考えるのに有効であるとするものの、必ずしも全てのジャンルに応用できない可能性もある。

最後の7では、分析した内容とそれに対する専門家の反応の照合が行われる。

このように、Bhatia (1993) は7段階にわたるジャンル分析法を提示するが、分析する際、必ずしも全ての7段階を考慮しなければならない訳ではなく、どの分析方法を用いるかについては、ジャンル分析の目的、焦点を当てるジャンルの側面、分析者のジャンルについての背景知識などによって変わってくると述べている (p. 22)。

3-3. SFL、ESP、コーパスに基づくアプローチ

Hyland (2004) は、ジャンル分析を、特定の言語使用を明らかにするディスコース分析の一派であり、どのように個々人が特定のコミュニケーション状況に参加するため言語を使用するかを見ることが、言語教育にその知識を応用するものであるとしている (p. 195)。

ジャンル分析には、テキストの構造、社会文化的要因、書き手の行為、受け手の期待を対象にするなど、多様なアプローチがあるが、どれも鍵となるのは「言葉」であると考え、調査法として「観察」「インタビュー」「テキスト分析」の組み合わせを説いている (p. 195, p. 209)。

具体的なジャンル分析法として主に2つ提示されており、一つはHalliday (1994) を中心に発展してきた、体系機能言語学 (Systematic Functional Linguistics、以下 SFL と略す) によるアプローチと、もう一つは特定目的のための英語 (English for Specific Purposes、以下 ESP と略す) によるアプローチである。それぞれ、次のように特徴が整理されている (p. 223)。

SFL analysis requires an understanding of the ways a writer's grammatical choices work to express particular textual, ideational, and interpersonal meanings, with patterns of theme, modality, types of nouns and verbs, and cohesion helping to construct functional stages of the text.

ESP analyses begin with collecting examples of relevant genres in a particular context, often with the

help of expert users, before identifying the move structure of a text and the main features of grammar and vocabulary it contains. ESP uses more varied models of language than SFL.

以下、それぞれのアプローチについて具体的に見ていくことにする。

SFL には、言語とは選択のシステムであり、それにより言語使用者は特定の機能を伝達することができ、自分たちの世界の体験を表明し、他者と相互関係し、首尾一貫した伝達内容を作り出すことができるという考え方が基本にある (p. 25)。

一般的に、理論的枠組みとしてよく用いられるのが言語使用域 (register) における 3 次元、即ち、Field (何について書かれているか)、Tenor (書き手と読み手の関係)、Mode (書き言葉か話し言葉かなど言語の役割) という概念であり、これに基づいたジャンル分析例もある (So, 2005)。

これらに加えて、書き手は社会的な目的を達成するために、SFL で言うところの「ジャンル」(explanation, recount, report, etc) という形態を選択すると考える。

SFL に基づいた具体的なジャンル分析方法としては、SFL では機能文法が要であるとし、以下のテキスト要素を見ることを指摘する (pp. 198–199)。

Staging, Clause structure, Types of verbs, Vocabulary, Noun groups, Circumstances, Cohesion

Staging とは、書き手が社会的目的を果たす手段で、異なる場面 (stage) や、各場面 (stage) における特徴を識別することであり、Clause structure とは一節以上の文の使用のことで、何がテーマとして初めに来るのかなど、伝達内容の始まりを指し示す。

Types of verbs は、テキストのなかで動作や過程を表す動詞のうち、どちらが多く使われているかなどの動詞選択に関することや、書き手がモダリティを表すために使用する法動詞の有無のことで、Vocabulary は語彙が、技術的、官僚的、日常語的かどうか、感情や態度を表明しているか、描写的かということである。

Noun groups とは、名詞を連ねて多くの情報を伝える名詞化のことを言い、Circumstances とはテキストが生じる時間、場所、様式のことを指し、最後の Cohesion とはテキストにおける指示や接続など、結束性に関わることを意味する。

次に ESP に基づくアプローチについて見ていきたい。

ESP においては、ジャンルを特定するため、コミュニケーション上の目的が主要な役割を果たすとし、指導者は、目的状況を理解し、学習者の現在の能力を判断し、文脈そのものからテキストや他の情報を収集するなど、学習者のライティング・ニーズを査定する必要があるとする。具体的な方法として、Swales (1990) による Move 分析があり、テキストの特徴や展開の動きを観察する一方で、以下の要素に着目することを説いている (pp. 204–205)。

Tense, Voice, Themes, Verb choices, Hedges, Noun groups, Promotional matter

Tense とは、例えば論文の各 Move において現在形や過去形など、どのような時制が用いられるかということ指し、Voice (態) は、一例として、書き手が共同執筆で、we が代名詞として用いられ

るとき、受動態や無生物主語が多く用いられる場合があることを指す。

Themes とは、何が研究されているか、又は、研究のプロセスを強調することで、研究の実証的側面を際立たせるのに役立つことなどを意味する。

Verb choices は、プレゼンテーション動詞 (discuss, describe, explore や show, demonstrate, find, establish) の使用から、目的や結果の展開 (Moves) を区別できることであり、Hedges とは、書き手の成果を過度に誇張することなく、相手の批判や別の意見を尊重するための婉曲表現を指す。

Noun groups は、前述した名詞化の度合いのことで、最後の Promotional matter とは、重要性や話題性、研究の関連性を強調し、読者に読み進めてもらおうと、説得することである。

以上のような SFL や ESP に基づくアプローチに加え、現在は、コンピュータを利用したコーパスの使用により、テキストの規則性を特定できるため、コーパスがジャンル分析の強力な手助けになっている (Hyland, 2004, McEnery et al., 2006; Bhatia, 2002)。

コーパスによる分析は、テキストを特徴づけるような高頻度の語や句、文法構造だけでなく、これらがどのようなコロケーションのパターンを示し、どう別の語句と結びつくかということも明らかにできることから、ジャンル分析の発展に大きく貢献できる可能性がある。

3-4. OCHA 及び PAIL アプローチ

ジャンル分析には、他にも、OCHA アプローチ (Noguchi, 2004) という手法があり、このアプローチを実際に用いた研究も見られる (野口, 2009; 深山, 2009; 宮永, 2009)。

OCHA アプローチとは、初めに、該当ジャンルのテキスト例を観察し (Observation)、次に動詞の時制や高頻度表現などジャンルの特徴を明らかにし (Classify)、これらの観察やジャンル特定に基づいて仮説を引き出し (Hypothesize)、実際のライティングに応用する (Apply) 一連の作業のことである。英語の頭文字を取って OCHA と名付けている。

また、このアプローチの項目の中の観察 (Observe) では、PAIL という考え方が重要となる (野口, 2009)。PAIL とは、ジャンルの目的 (Purpose)、情報の受け手 (Audience)、情報 (Information)、言語特徴 (Language features) の頭文字を取ったもので、言語特徴については、さらに細分化され、情報の提示順序 (Rhetoric)、時制・態・代名詞などの文法的特徴 (Grammatical)、語彙・品詞 (Lexical)、フォーマットやスタイルなどの専門的特徴 (Technical)、話し言葉においては音声的特徴 (Phonological) に分かれ、これらに着目して言語分析が行われる。

このような OCHA 及び PAIL に基づくジャンル分析法は、教師が教材開発のために用いるだけではなく、学習者自身もこうした分析法を身につけることが求められており、それにより、ニュース、Email、手紙、仕様書、論文、特許明細書など、様々なジャンルの特徴の違いを把握しやすくなるので、有用であるとされている (野口, 2009; 深山, 2009)。

4. 考察

これまで概観してきたように、上述したそれぞれのジャンル分析のアプローチについて、研究者によって特徴が認められる。Swales (1990) が Move 分析により、主としてテキストがどのように展開しているのかを観察するのに対し、Bhatia (1993) はテキストの置かれた状況文脈を重視し、テキストの言語分析だけでなく、文献調査や専門家へのインタビューなど、テキストを取り巻く状況からジャ

ルの規則や慣習性を捉えようとしている。野口 (2009) はジャンル分析法を、OCHA 及び PAIL など、アルファベットの頭文字で分かりやすく、簡単に覚えられるよう工夫し、Bhatia のように、言語分析に加えて、ジャンルの目的や受け手などの状況文脈を視野に入れながら、仮説を立て、応用を試みるところまで踏み込んで分析の対象にしている。Hyland (2004) は、SFL、ESP、コーパスによるアプローチの3種類を紹介しており、SFLやESPのアプローチでは、具体的な文法項目などを提示して、分析への示唆を与え、コーパスの有用性についても言及している。

共通点としては、Swales (1990) の Move 分析の影響が、Bhatia (1993) の6段階目のレベル3や Hyland (2004) の ESP に基づく分析、野口 (2009) の言語特徴 (Language features) における情報の提示順序 (Rhetoric) に見られる。また Bhatia と Hyland においては、分析対象となるジャンルのコーパスを構築し、分析することの有用性が指摘されている。

もっとも Hyland が、他の研究者が一般的な分析枠組みを提示しているのとは違い、分析すべき文法項目を列挙しているのは具体的で分かりやすい反面、SFLとESPでアプローチを区別し、分析項目をそれぞれで固定するのが、どれだけ意味のあることなのかという問題は残されている。

いずれにしても、各アプローチにおいて、ジャンルを表象するテキストの言語情報はもちろんであるが、ジャンルの目的、読者、書き手と読み手の関係、下位ジャンル、歴史、慣習性、ガイドブック、専門家へのインタビュー、コーパスなど、ジャンルを取り巻くありとあらゆる資源を総動員し、ジャンルを捉えようとしていることが特徴と言える。

また、英文ライティングのためのジャンル分析ではないが、コーパスを利用し、ジャンルを純粹に分析しようとする Biber (1988) の試みや、単語の連なりである N-grams により Web 上のジャンルを特定しようとする研究 (Mason et al., 2009) などについては、ジャンル分析として応用できる可能性がある。

学習者の観点からは、どのアプローチも専門家によるジャンルテキストを分析対象にしているものの、そもそも専門家と学習者では書く際の状況やコミュニケーションの目的が異なるのではないかと指摘があり (Hüttner, 2008)、大学において学ぶという学習者の状況により合ったジャンルテキストを考慮することも必要である。

5. おわりに

本稿では、L2 ライティング教育のアプローチの一つであるジャンル分析について、既存の理論を整理し、比較することで、その共通点や違いを明らかにしてきた。

ジャンル分析は、これまで見てきたように、Swales の Move 分析というシンプルなものから、多様なアプローチへと進化し続けている。ジャンルの多様性を、より多方面から捉えようとする方向へと動いている。それに伴い、分析方法も総じて複雑なものとなっている。

しかしながら、こうしたジャンル分析の進展にもかかわらず、各ジャンル分析のアプローチを比較検討する研究は非常に少ないというのが現状である。専門化していく傾向にある L2 ライティング教育において、個々のジャンル分析のアプローチだけでなく、本稿のように、全体的に理論面からジャンル分析を研究する必要性も求められていくものと思われる。

参考文献

- 大井京子 (2004). 「第11章 ライティング」小池生夫 他編『第二言語習得研究の現在 これからの外国語教育への視点』(pp. 201-218) 大修館書店.
- 田地域彰他 (2008). 「英語学術論文執筆のための教材開発に向けて—論文コーパスの構築と応用—」『京都大学高等教育研究』14, 111-121.
- 野口ジュディー (2009). 「ESP のススケーター応用言語学からみた ESP の概念と必要性」福井希一、野口ジュディー、渡辺典子編『ESP 的バイリンガルを目指して 大学英語教育の再定義』(pp. 2-17) 大阪大学出版会.
- 福井希一、野口ジュディー、渡辺典子編 (2009). 「ESP 的バイリンガルを目指して 大学英語教育の再定義」大阪大学出版会.
- 宮永正治 (2009). 「ESP 的視点による英語 e-learning コンテンツの開発」福井希一、野口ジュディー、渡辺典子編『ESP 的バイリンガルを目指して 大学英語教育の再定義』(pp. 162-170) 大阪大学出版会.
- 深山晶子 (2009). 「専門教員との連携プロセスのノウハウ」福井希一、野口ジュディー、渡辺典子編『ESP 的バイリンガルを目指して大学英語教育の再定義』(pp. 60-73) 大阪大学出版会.
- Bhatia, V. K. (1993). *Analyzing genre: Language Use in Professional Settings*. London: Longman.
- Bhatia, V. K. (2002). Applied genre analysis: a multi-perspective model. *IBELICA*, 4, 3-19.
- Biber, D. (1988). *Variation in speech and writing*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Dudley-Evans, T., & St. John, M. J. (1998). *Developments in ESP: A multi-disciplinary approach*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Flowerdrew, L. (1993). An educational, or process, approach to the teaching of professional genres. *ELT Journal*, 47(4), 305-316.
- Flowerdrew, L. (2005). An integration of corpus-based and genre-based approaches to text analysis in EAP/ESP: Countering criticism against corpus-based methodologies. *English for Specific Purposes*, 24, 321-332.
- Furuya, N. (2006). A Genre Analysis: The Fashion Show Press Release, *Journal of Bunka Women's University*, The humanities and social sciences, 25-35.
- Hafner, C. A. (2008). *Designing Implementing and Evaluating an Online Resource for Professional Legal Communication Skills*. Unpublished doctoral thesis, Macquarie University, Sydney.
- Halliday, M.A.K. (1994). *An introduction to functional grammar* (2nd ed). London: Edward Arnold. (山口登、笈諒雄訳) (2003)『機能文法概説—ハリデー理論への誘い』くろしお出版.
- Hüttner, J. I. (2008) The genre(s) of student writing: developing writing models. *International Journal of Applied Linguistics*, 18(2), 146-165.
- Hunston, S. (2002). *Corpora in applied linguistics*. Cambridge, UK : Cambridge University Press.
- Hyland, K. (2003). Genre-based pedagogies: A social response to process, *Journal of Second Language Writing*, 12, 17-29.
- Hyland, K. (2004). *Genre and Second Language Writing*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press.
- Hyland, K. (2007). Genre pedagogy: Language, literary and L2 writing instruction. *Journal of Second Language Writing*, 16, 148-164.
- Mason, J. E., Shepherd, M., & Duffy, J. (2009). An N-gram Based Approach to Automatically Identifying Web Page Genre. *Proceedings of the 42nd Hawaii International Conference on System Science*.

- McEnery, T., Xiao, R., & Tono, Y. (2006). *Corpus-based language studies : An advanced resource book*. London: Routledge.
- Noguchi, J. (2004). A Genre Analysis and Mini-Corpora Approach to Support Professional Writing by Nonnative English Speakers. *English Corpus Studies*, 11, 101-110.
- Paltridge, B. (2004). Approaches to Teaching Second Language Writing. *Proceedings of the 17th Educational Conference Adelaide*.
- So, B. P.C. (2005). From analysis to pedagogic applications: using newspaper genres to write school genres. *English for Academic Purposes*, 4, 67-82.
- Swales, J. M. (1990). *Genre Analysis: English in academic and research settings*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

A Comparative Study of the Approaches of Genre Analysis for L2 Writing

Goro Takaaki

The purpose of this paper is to compare several approaches of genre analysis for L2 writing to reveal what differences they contain, trying to extract the common framework for doing genre analysis. In L2 writing, genre analysis, which identifies generic features of model texts to apply them to language education, has been implemented in mostly EAP and ESP, dealing with a wide range of subjects from academic to professional settings such as research articles, editorial letters, legal cases and job applications. However, genre analysis itself has not been much examined despite its various approaches. With the increasing concern about more specific L2 writing, it will be required to investigate these approaches through comparison, and identify what their differences are. In this paper, after the detailed review of the representative approaches of genre analysis conducted by Swales (1990), Bhatia (1993) and Hyland (2004), it was found that genre analysis tends to be focused on the rhetorical pattern of texts as seen in Swales' move analysis; it is crucial to consider as many other factors surrounding a genre as possible, along with the use of corpora that enable genre analysts to easily see frequency and collocation of words and phrases in the texts.